



假名垣魯文校  
京文舎文京巻述  
梅堂國政畫圖

いろは新聞二度目浄書  
名廣澤邊山平  
第二號

金松堂壽梓  
元田影長

下

中

上



乃は新聞二度目浄書

名廣澤邊山洋

第二號

金松堂壽梓

元田勝長

上



A487  
4

# 名廣澤邊萍三編

上三巻

魯文校自

文系著述

國政要圖

手抄本



明治の新政幕府の苛酷壓制と掃蕩一伴食の宰相鉄面御史と  
 一洗一以て言路洞開の予日に至らむるへ社稷の名臣王位の才真  
 は是の當と得るふ依り芳名廣々天下潤澤と布き朝堂に  
 參政する人維新創業不冠るも豺狼道と横断蒙雲明月  
 と覆ふの災厄あり嗚呼天変地妖も亦造物の然らむる者歟  
 凡慮嘆あるも餘りなりと余が机下の壯史渡邊文京彼顛末と  
 筆記し本社新聞毎號に掲載する処書肆金松堂切み乞て別  
 合巻の小冊に製し既初編の発売と報せ次で二編稿成て例の  
 序言と促すや急ぐ故に文潤色なく意果實なき贅語  
 と演て以て書肆の責を遁る実己を得ぬ場合よと

明治十三年第二月

いろは新聞社長金花猫翁題



<48-2239>



板垣鉄之助長崎  
 圓山遊興ノ圖

唐沙二

前參議廣澤真臣公像



名廣澤邊洋二編之上

東京

假名垣魯文校閱  
京文舎文京著述

第四回

暗夜の血戦壯士交りと結ぶ

高松此然天涯は從尊元山怪羊腸ある九十九折山又山は連  
眼の射る連る凸凹は毒蛇の蟻居るは筋佛さう瀝瀝たる  
溪水は年竊と洗ひ蒲翹たる松海を本視し家々物凄  
掛指と傳ふ猿猴の声雲弁は翔る雁金の憐し撞出を  
山寺は女情を考る逢魔時寂滅為樂と考くある秋の月  
脚の履くらくる山は燈は光り渡る月は深き只一人爰は  
名は負ふ薩摩海門嶽の半腹まで究り来り一個の人  
物その衣裳を身へ着ては顔中よりふ面終と色も必は



るき 木綿の肌  
服は目下  
の長羽織  
一着は小  
倉の  
袴は佛  
蘭西装  
の長靴  
とすち  
題の  
虎  
半  
捲  
ひ  
頭

山方とさる  
せりさる  
由緒

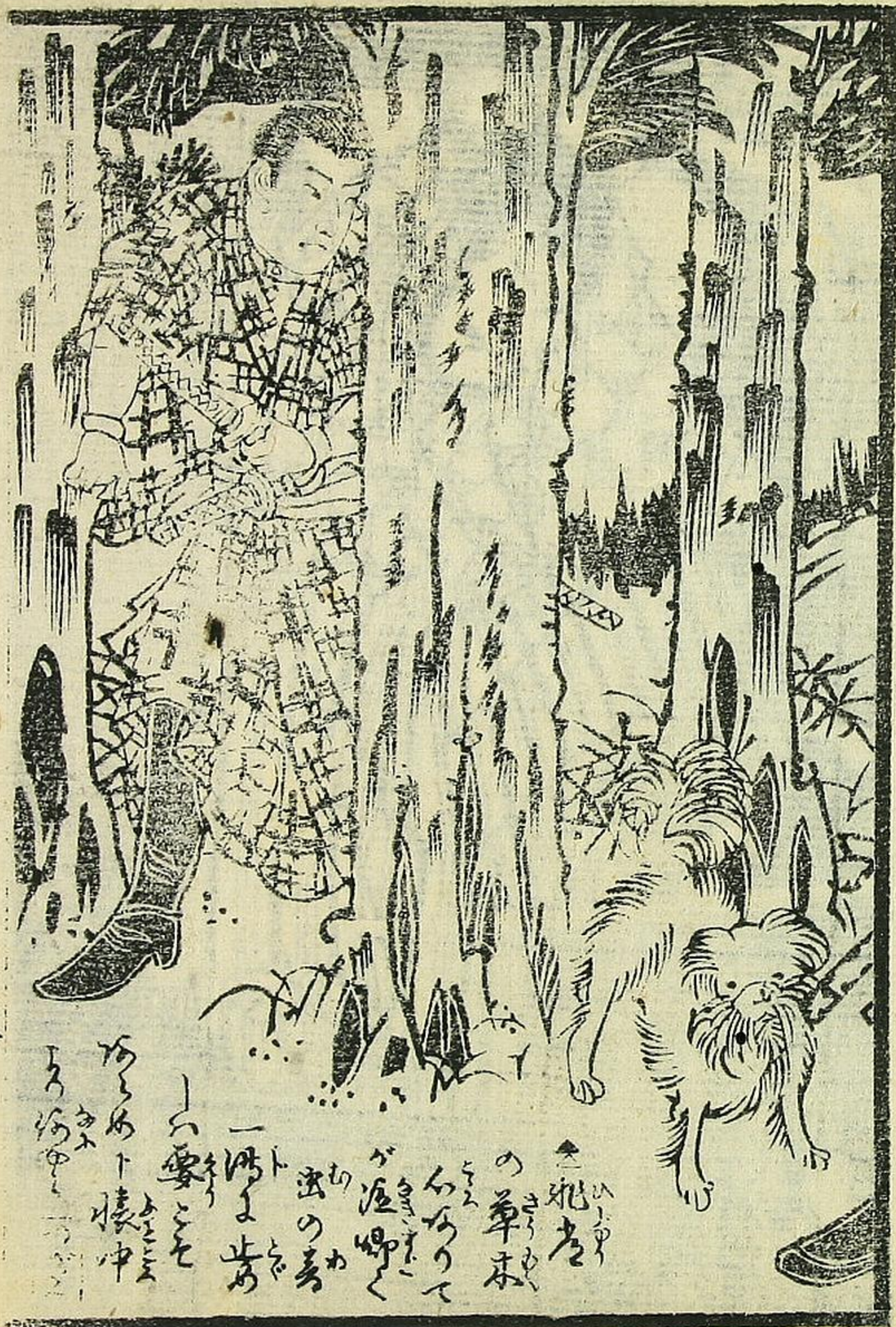


髪縮れ  
て夜女の  
眼  
の光  
と  
り  
人

下麻  
の  
一  
下  
麻  
の  
一  
下  
麻  
の  
一

夜上  
の  
一  
下  
麻  
の  
一  
下  
麻  
の  
一

鹿外  
の  
山  
野  
と  
さ  
る  
武  
士  
の  
操  
を  
犬  
に  
教  
え  
し  
ま  
す  
と  
犬  
は  
夜  
に  
吠  
え  
し  
ま  
す



いんげん  
の草本  
のありて  
が泣く  
出の芳  
一酒よ  
一薬こそ  
あつめ  
あつめ  
あつめ



ち  
くさ  
あのみ  
月と電  
てうま

秋の

つぎと  
とせーが  
ハチ  
こそ  
あつめ  
あつめ  
あつめ

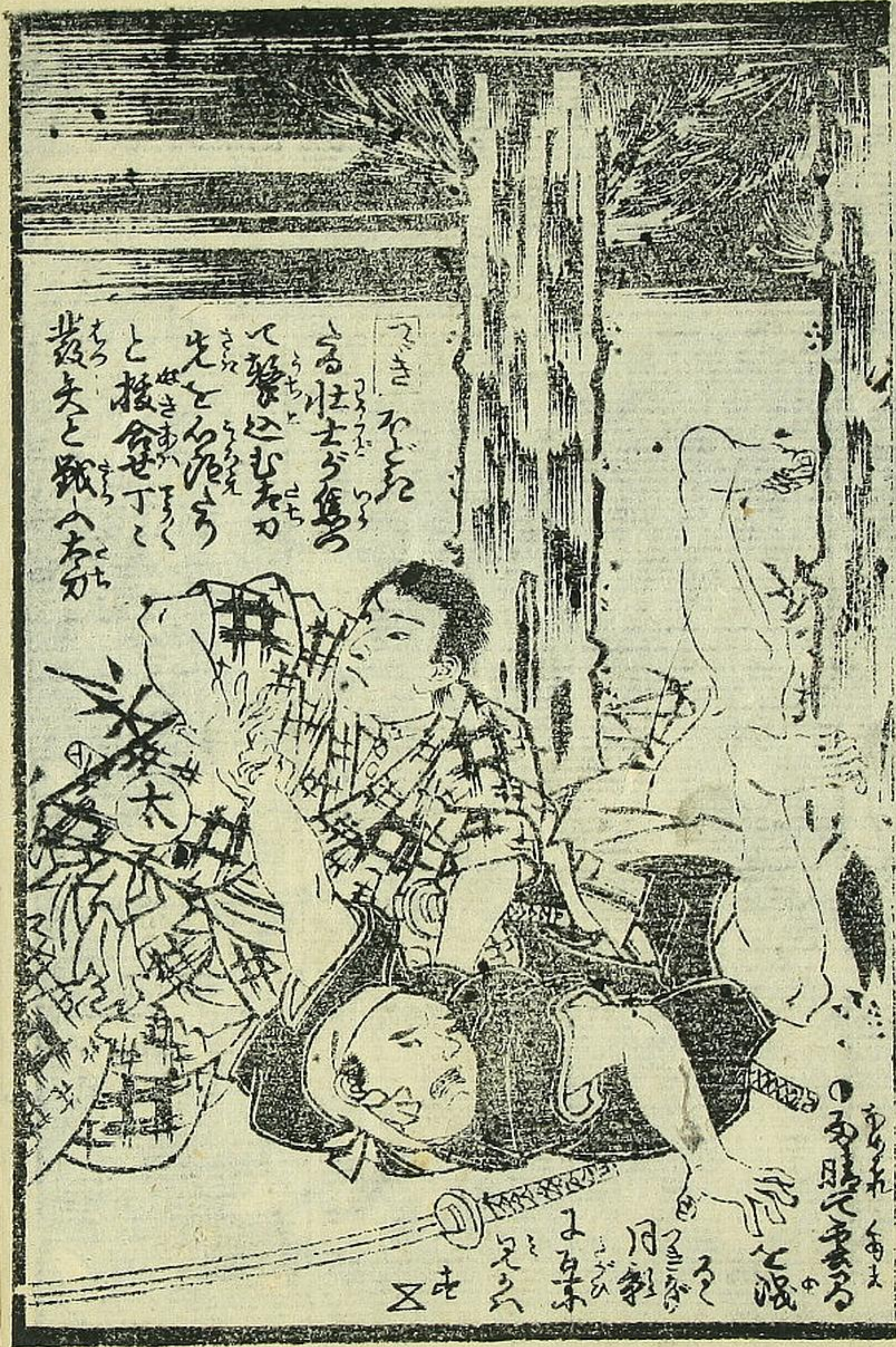
桐



三十一

三十一







つぎ 諸君を初物梅りこ  
 くれバ利秋の交り又交  
 一等りのとあり故に武藝  
 あり性一存睡程の大志  
 あり豊小教と起て交せんや  
 又と退けとせりせも果む  
 さらるるをいと知りさる  
 その別腹を感さんと▲

利秋と見えん解  
 同う一まあ  
 方の武藝  
 腹力只ある  
 中こめひらる  
 梅と

ふもあは  
 奮田勢突然あふ  
 小遠家あつ  
 お目一英傑  
 秀小守あ  
 一康児あふ  
 去者つりとゆえん相世と

あふるる  
 板垣を弟の海下と互に遠らぬ仕士の  
 眼力なと頼みぬつて手分停すはよ  
 せよあめて得らぬ由安由源山の者  
 候あり杉屋を末現は雪く漢水の  
 若し應はるは群るのこ又安と命  
 ありらう糖とゆえ利松の感強と決へ



つぎ 諸君を初物梅りこ  
 くれバ利秋の交り又交  
 一等りのとあり故に武藝  
 あり性一存睡程の大志  
 あり豊小教と起て交せんや  
 又と退けとせりせも果む  
 さらるるをいと知りさる  
 その別腹を感さんと▲

利秋と見えん解  
 同う一まあ  
 方の武藝  
 腹力只ある  
 中こめひらる  
 梅と



つきたるい我々の大船之器美途を成の友とゆふ我哀情を捨たさるへ  
 一得の力と海之友の幸ひ此よまをそのな一因に稱あるとの深山秘密と  
 るの幸原亮か明一の名板垣氏といを直に希い歎息一「左室ふ相  
 氏平坂のゆかよるる我幸後を思ふと必と憂ある一徹の大衆  
 源平弟と庇陰するその形不軌と傳るよ毎と目此の忠義も水の流  
 ささしを幸ひ不物流て殺免さ直これども胞まで費ぬく夫達の魂  
 東系より方て貴族等が速白さ直一「信輔の教養へ詳細は知るは  
 ど大概我備有と符合するその志一同下れば千里の遠きも一親  
 くその志一「是る共六合壁由極めく味う疾苦思と思ふらち類  
 と抱く曙の関雅教なるを一貴族等が石佛氏をそとめとて冠  
 りを掛け束系とちり然然解りよ後仕せりと漢むよ本意あり  
 我胸中去と止むきりあるを幼他と推うる危も角もと高城へ系  
 平人傳よまといあよ固これハ世輯畫のくハ滑り水と願ふと中巻へ

夜叉神 八尾編 夜叉神 八尾編

名廣洋邊萍 九尾編 名廣洋邊萍 九尾編

水錦偶田曙 三尾編 水錦偶田曙 三尾編

格蘭氏傳倭文賞 三尾編 格蘭氏傳倭文賞 三尾編

地本問屋 錦繪問屋 金巻堂 長山問屋 助





10

15

20

25



名廣澤邊萍二編之中

東京 假名垣魯文校閱

東京舎文京著述

上の巻よりき 世を塵外に避つて終日山野に格操して不平を抱く素振  
 るど絶てつるに因りて世を是れは是れ源き策累り世人を絶つたまたり  
 うと思ふよ遠いぬ今夜の奇遇を拾ひ一巻の別ち義黨の松  
 ひ文望るあつるぬれど海しぬと云ふが、腰あるまゝと云  
 ぬし被る志よ暑茶に元のごくは寒細り相尋のあよさう壺の  
 友人友よ義を修び樂を考よせよと云ふは受ひて考よまゝに一月日は生  
 是はとも同月よ死をべしと格言ひて高年者一密然りゆゆ  
 事う死者も知らざる惜くゆりてまよふ可ままに相世氏一板垣どの  
 一昔よ去る右むねをま下右となし袂をもちまをうんとまをねし由

書





一、群一職人作の之運海が  
 云々其等の海世格一由  
 政府の法云々号  
 社会の病と云  
 知ら振の自惚  
 俗人の風俗の老悪  
 虚脱又乳る一犬の  
 俱身小達と云  
 不六が実と  
 修て大業  
 又汁と日無  
 めを標とほと地球と  
 以て地球と云



の面ア見るとは橋  
 くは後の中が  
 精霞  
 之う流が

原は是のちた海流  
 多が連の男ふらち  
 向ひ可々然的  
 おのく世が流きま  
 つをだんくむ等  
 い帳より流  
 の五ねへの斗り  
 生と徳川の自  
 分とア懐中を由  
 吹くとも天網  
 さるふらつそと  
 目ふ誇し流と大糸  
 素気是との由毛衆人が眼の全衆と



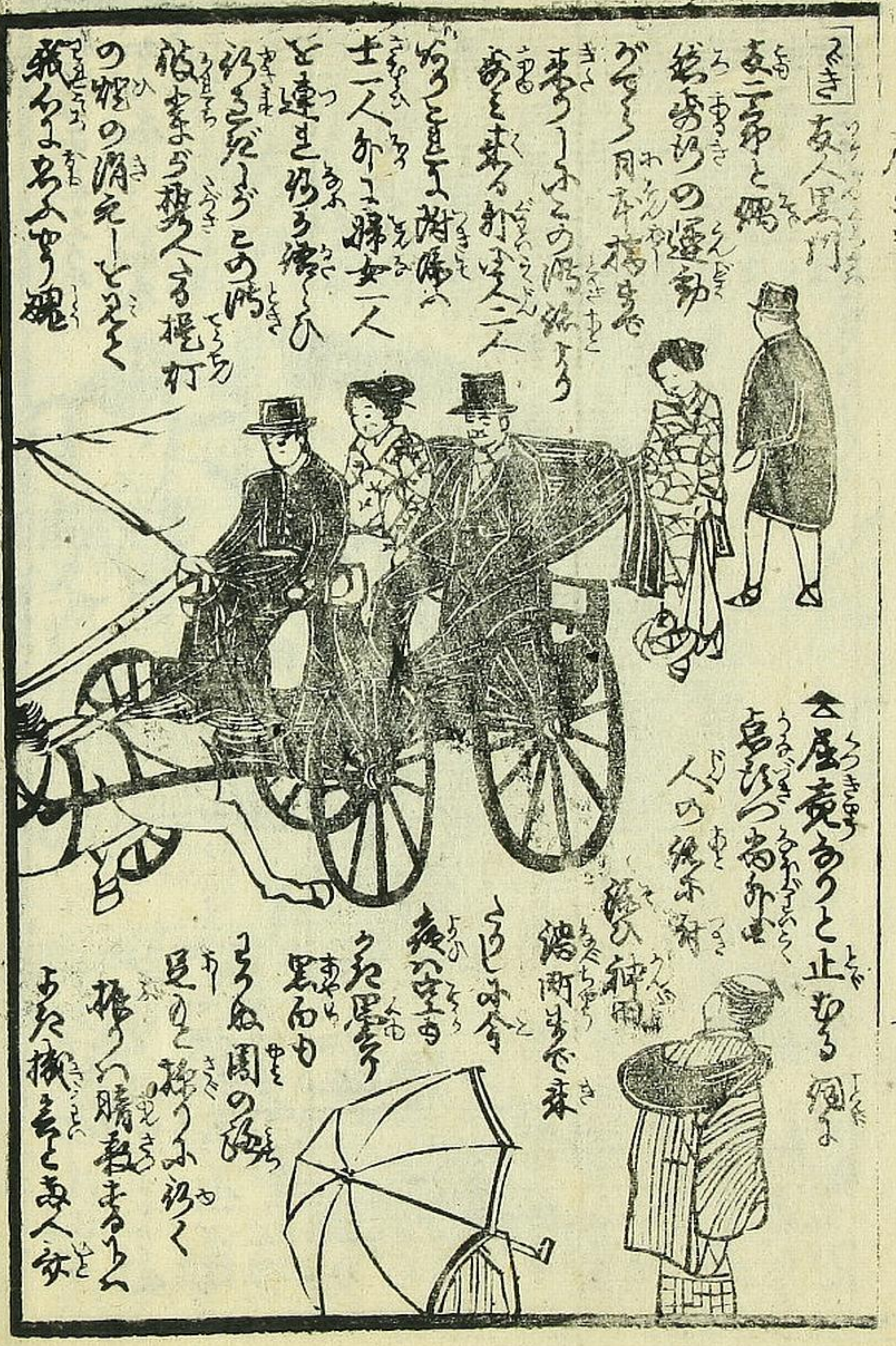
併てあつたを向ふ済米た揚安  
 産片膚ぬはそ大職なり  
 勢の上をともはるは方  
 の男ハ笑ひ出さし可はるん  
 るは想るはアおん初  
 あるの由情ある来るあ  
 免がらん起してと後  
 の命とては度合か  
 此のの畫とと意  
 起す小後負の蓋ゆり  
 なるぬらつて一様  
 世と夫精不やなく  
 命ふ流の流し由坐

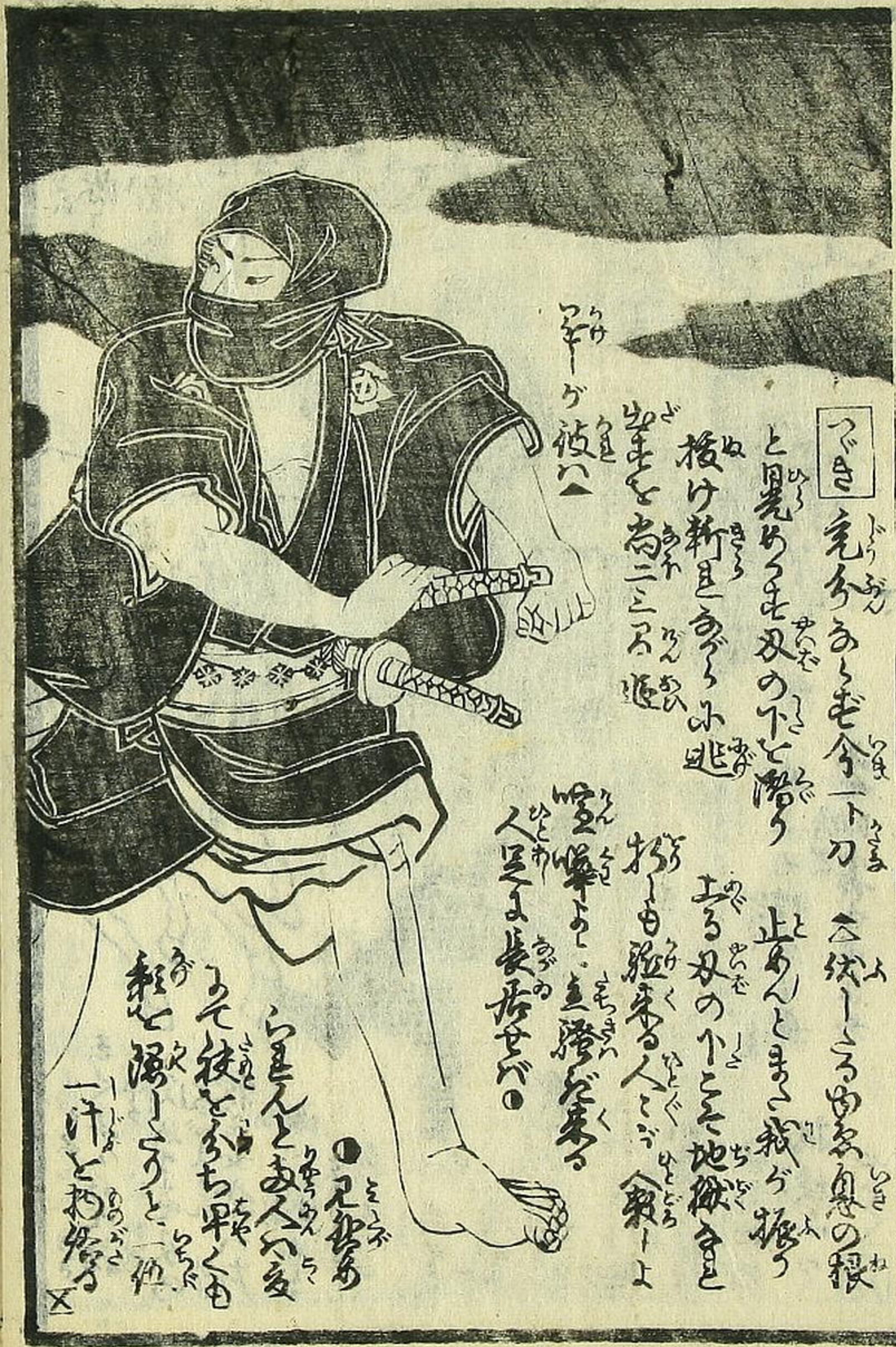








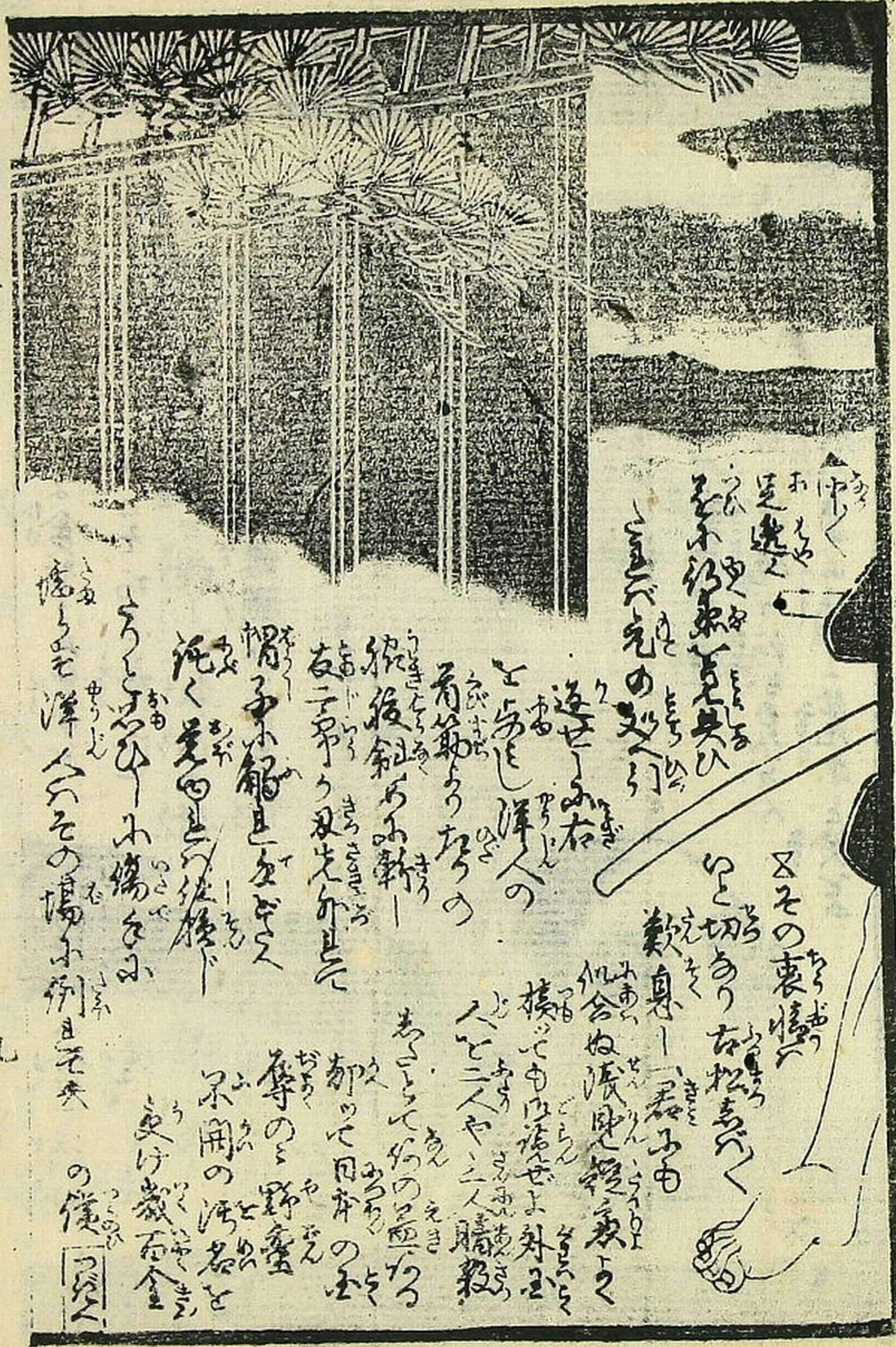




つぎ

先かあらむ今下刀  
と見ゆるま双の下と潜り  
掛け新屋あつふ逃  
止あんとまゝ我が振う  
上る刃の介と地獄を  
揚り由難き人こゝに  
空撃つと、魚燈を奪  
人足よ長居をば。

●足指あり  
らまんとあ人の  
うそをち早くも  
軽と強くうと一他  
一汗とわける



おれは  
足指あり  
らまんとあ人の  
うそをち早くも  
軽と強くうと一他  
一汗とわける  
又その衷情  
と切ありな松あく  
歎息一君ふゆ  
相合ぬ浪見船乗り  
横つて由は後せよ外玉  
人て之や二人贈殺  
あつて何の  
都て目弁の玉  
奪の野壘  
不用の活者  
受け盡る全  
の儀



つぎ金と彼を... 食む... 笑ひ...  
遺す... 此の... 汗...  
二三の... 懐...

あつて... 笑ひ... 懐...  
あつて... 笑ひ... 懐...  
あつて... 笑ひ... 懐...

今... 笑ひ... 懐...

許官 天泰丸  
許官 天泰丸  
許官 天泰丸  
許官 天泰丸  
許官 天泰丸

文 地本問屏  
文 地本問屏  
文 地本問屏  
文 地本問屏







假名垣魯文校  
京文舎文京著述  
梅堂國政畫圖

下



A487  
6



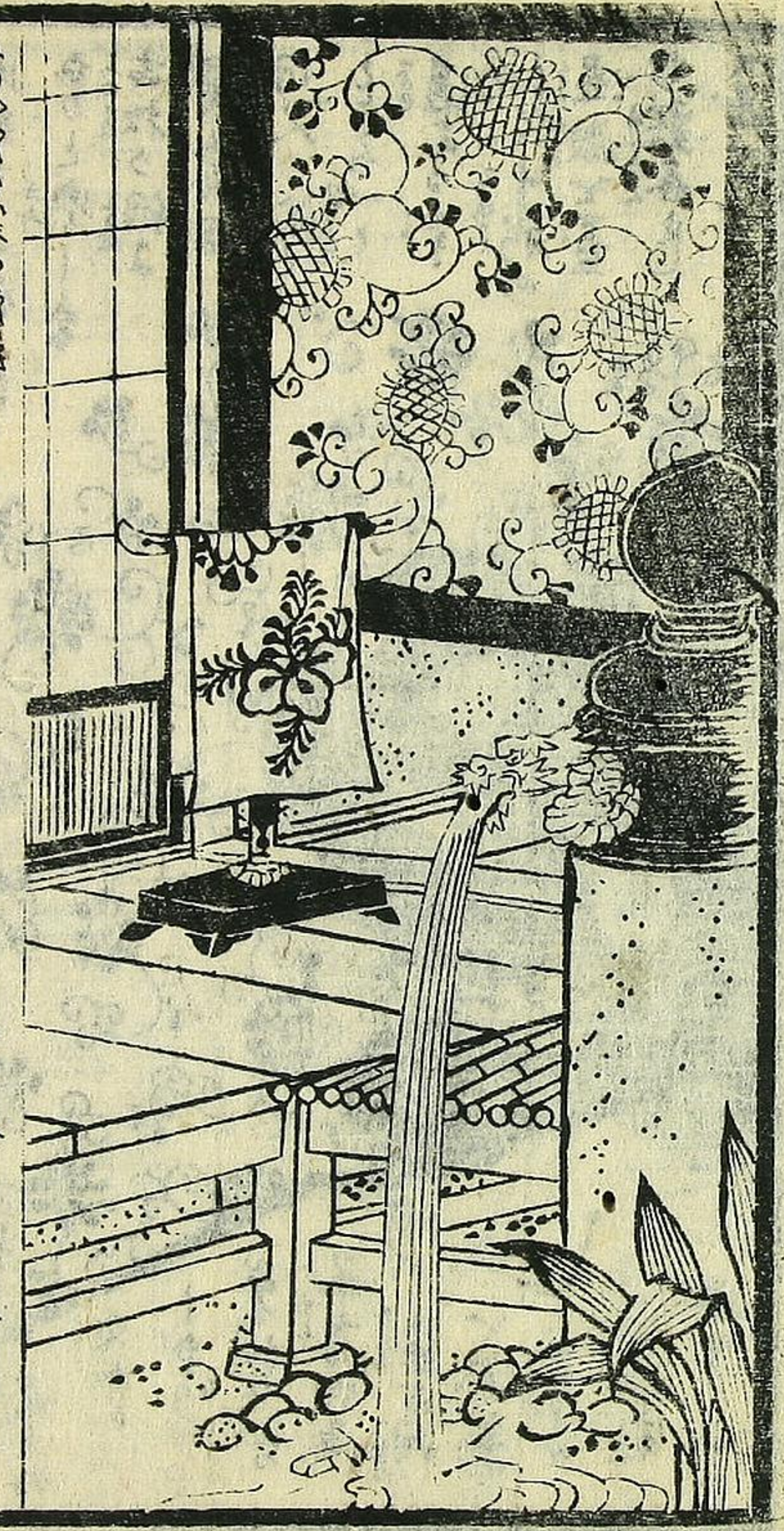
<48-8241>

名廣澤邊萍二編之下

東京

假名垣魯文校閱  
京文舎文京著述

第五回 激徒の煉暴夜功臣の刺



状と正し  
 一葉を  
 遊げ  
 後を  
 而念千  
 悔や  
 今更  
 此の  
 朝延  
 矢お  
 とま

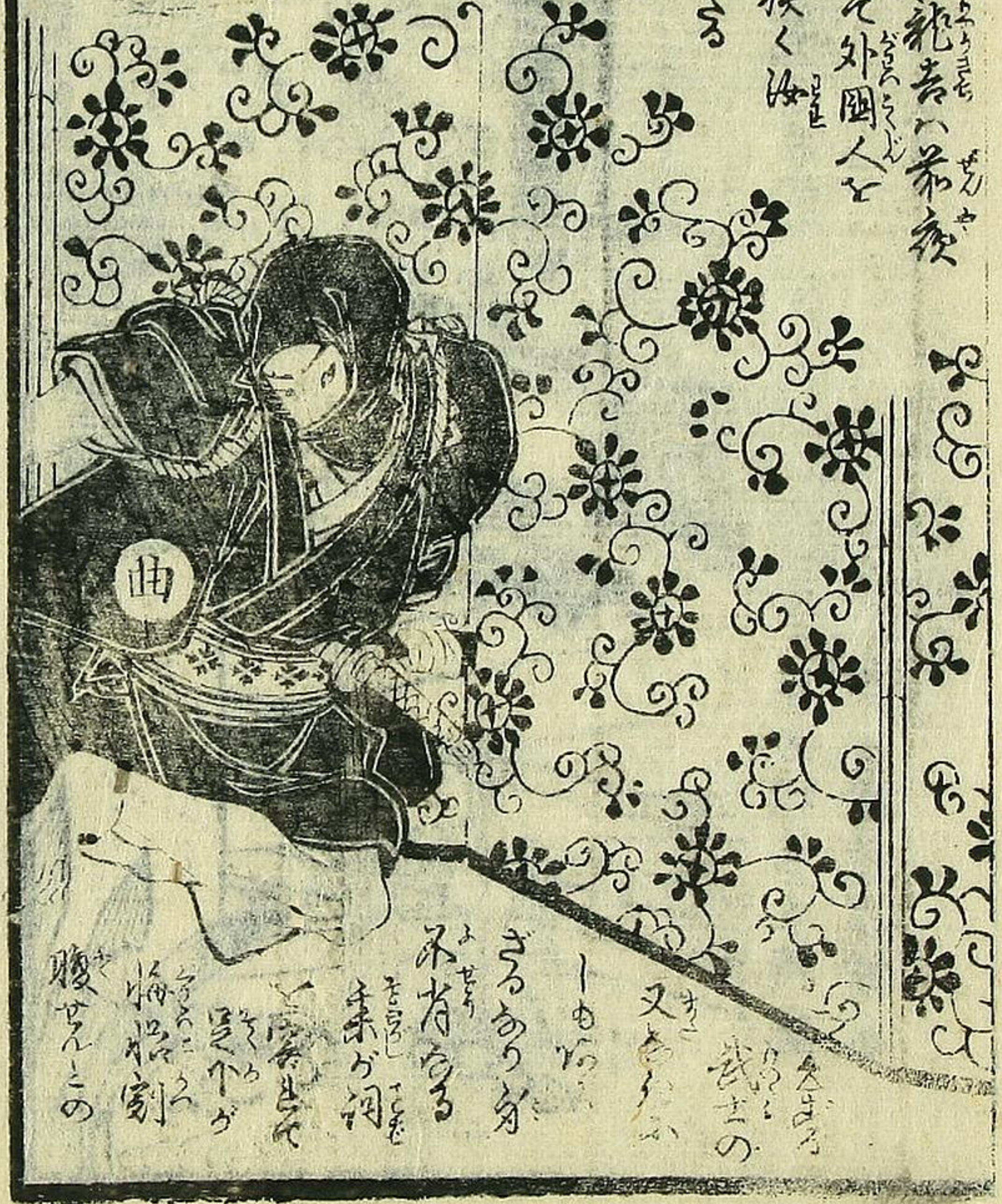
状と正し  
 一葉を  
 遊げ  
 後を  
 而念千  
 悔や  
 今更  
 此の  
 朝延  
 矢お  
 とま

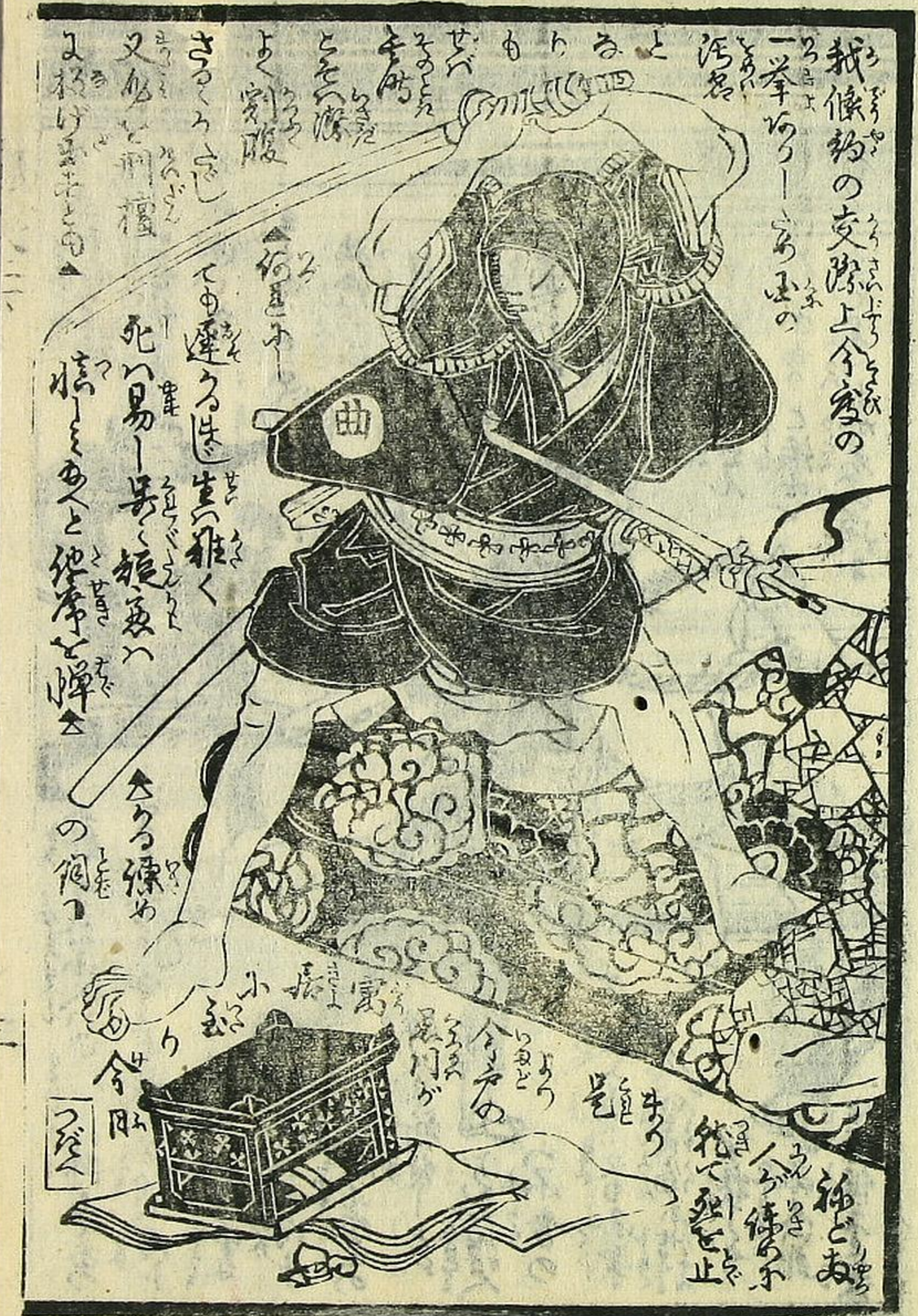
状と正し  
 一葉を  
 遊げ  
 後を  
 而念千  
 悔や  
 今更  
 此の  
 朝延  
 矢お  
 とま

再後由加  
 神田  
 暗殺  
 ありと  
 古松  
 騒ろ  
 同人  
 適まる  
 深く  
 過激  
 ち黙  
 て

再後由加  
 神田  
 暗殺  
 ありと  
 古松  
 騒ろ  
 同人  
 適まる  
 深く  
 過激  
 ち黙  
 て

再後由加  
 神田  
 暗殺  
 ありと  
 古松  
 騒ろ  
 同人  
 適まる  
 深く  
 過激  
 ち黙  
 て



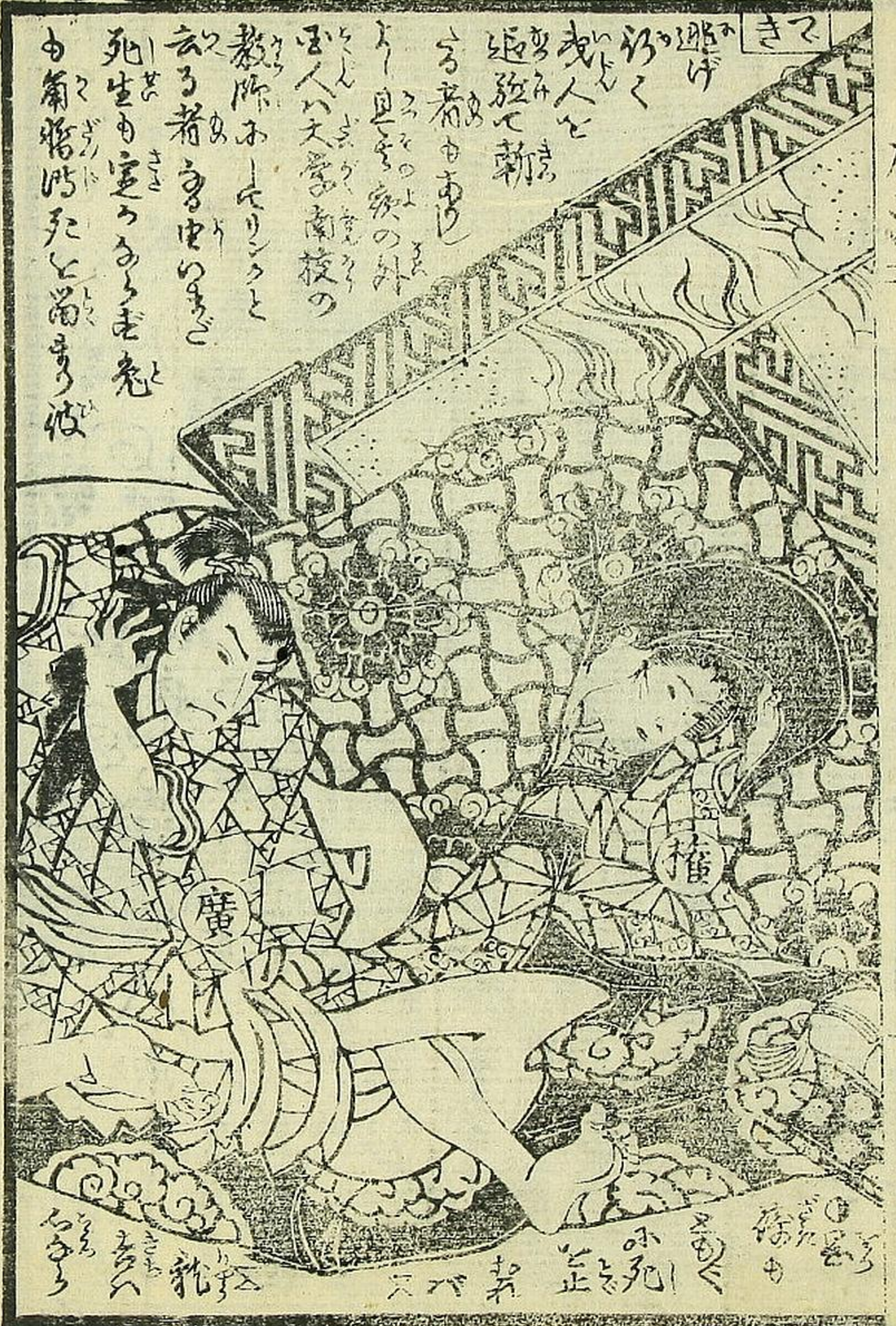


我儀物の変際上今迄の  
 一挙のりーあまの  
 汚名  
 りるよ  
 もり  
 其  
 全  
 とを  
 よ  
 さるく  
 又必  
 又必  
 又必

死の易い果てに  
 信しよと他帯と弾

の個

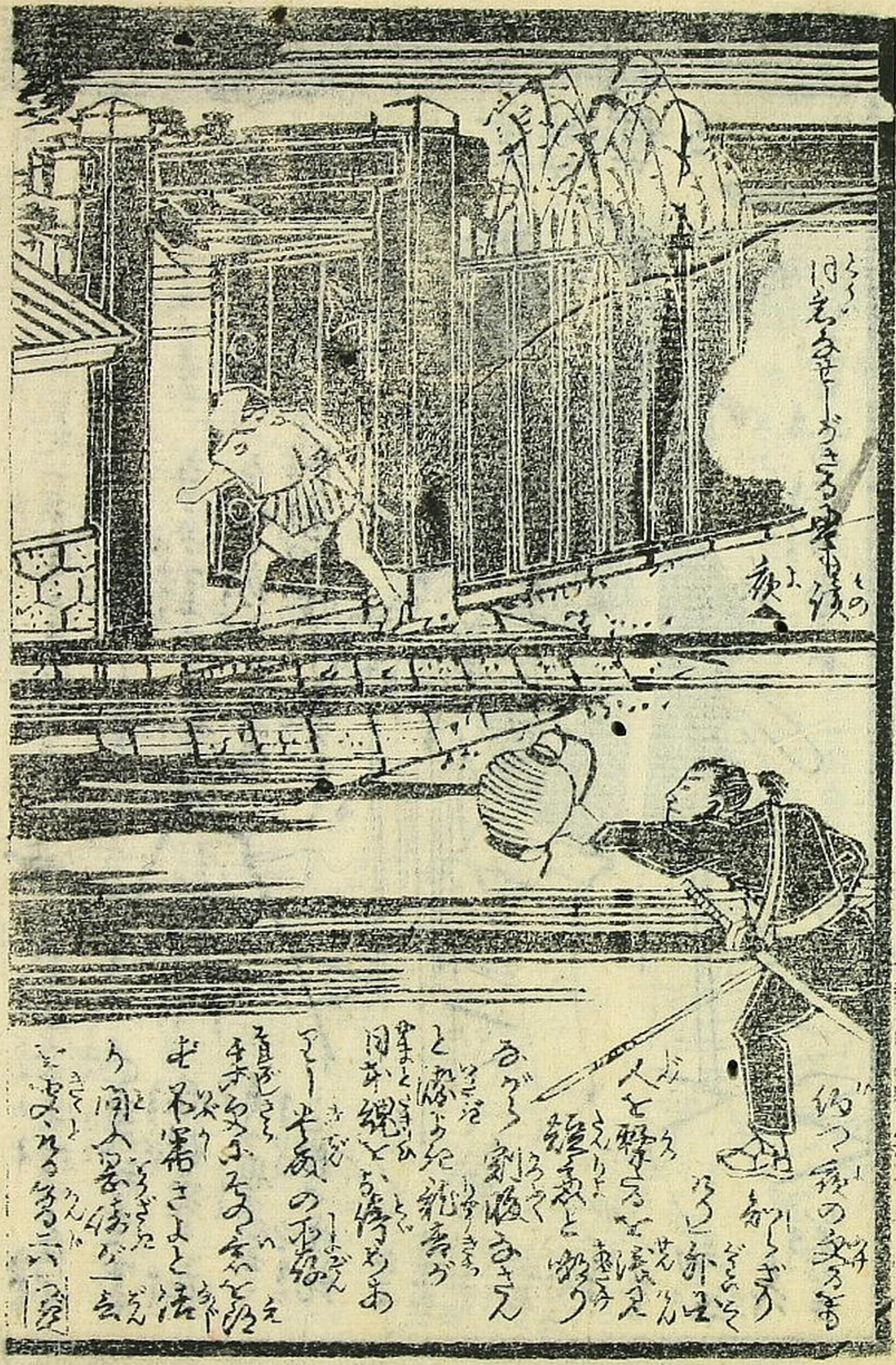
小  
 今  
 神と  
 我  
 止



逃げ  
 死  
 返  
 方  
 人  
 教  
 云  
 死  
 由

廣  
 推  
 正  
 六

廣



同老まきごらるる中後

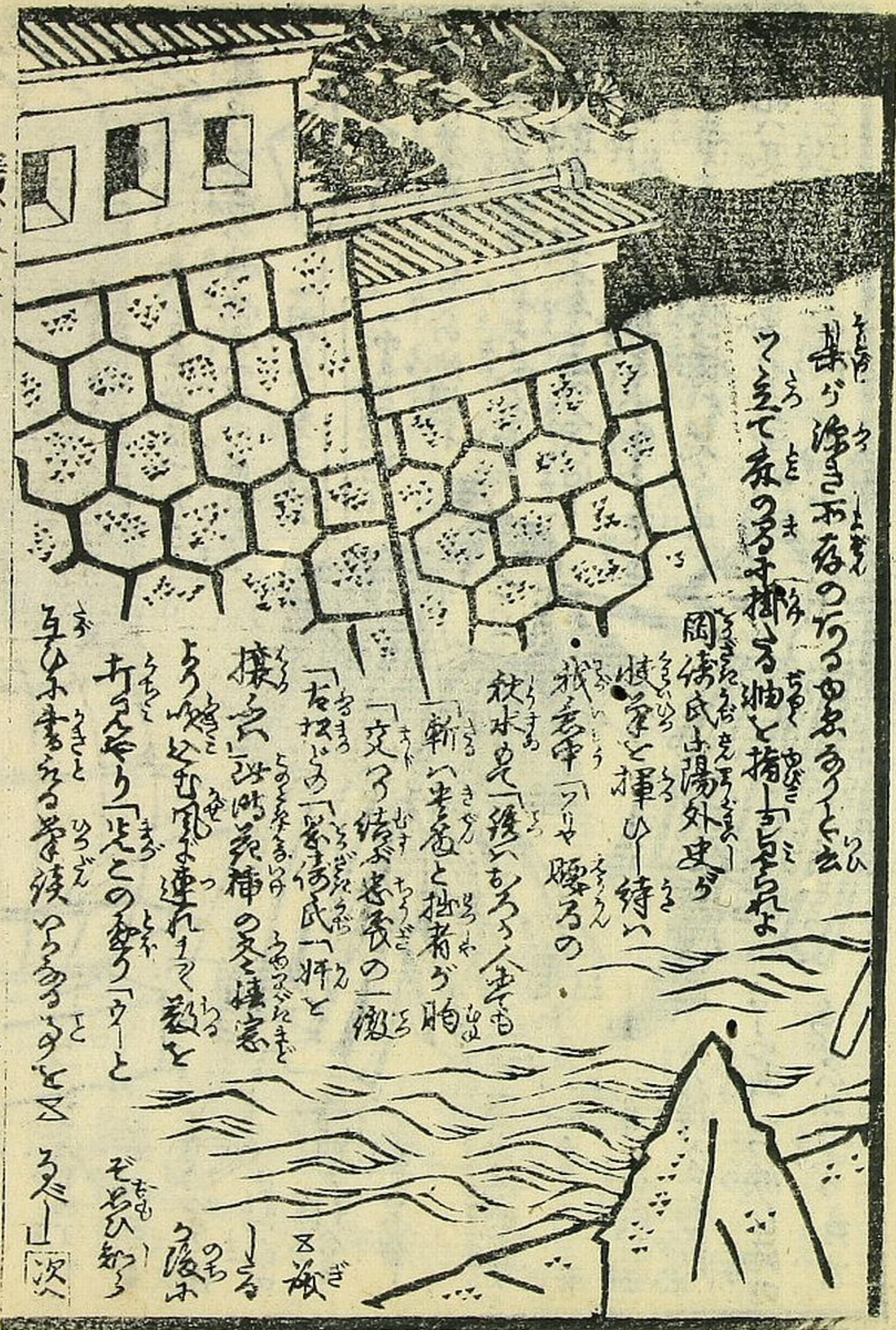
約つたの文書  
 人を撃つるは誤り  
 経典と教り  
 かくら刺殺さるん  
 とはさるに死なす  
 日本總とを修めあ  
 さい半成の事  
 直色さ  
 手あふふその事  
 せ不審さよと法  
 り同入家法が一  
 とまなる事六



つさ右松分は  
 訪し小松橋由末  
 合は徳くあ

あつと  
 病の法  
 洋細の法  
 松が故編題  
 遍の情  
 さし命  
 ぐら合修ら  
 活法を術へん  
 名まありと法ま  
 変て果川由加後

斬る外は人の  
 ろりまの  
 池の雲  
 けりてあ日ド  
 鴉町あその  
 洋人斬り  
 不意の  
 ぬる下又  
 の候備小  
 後  
 二人死  
 生を俱



其の海にありのちのちありと云  
つきて存のるす掛る物と指しおとす

岡橋氏山陽外史  
杖水の尾一後いもろく人未由  
斬ハキ巻と拙者ガ胸  
「文子結衣巻の二後  
「右様どういふ御氏一軒と  
攘之此時花柳の冬様  
より此を風よ連れしと  
打らるり「是のなり「うと  
互ひ小書なる巻紙のさるめと云  
「次ハ



ついで打頼美と血札ハ  
速く身を深きる事  
年寄と戒めまは  
毎日のあつらひ  
字をゆくと未  
後小書巻のさるめ  
杖水の尾一後いもろく人未由  
斬ハキ巻と拙者ガ胸  
「文子結衣巻の二後  
「右様どういふ御氏一軒と  
攘之此時花柳の冬様  
より此を風よ連れしと  
打らるり「是のなり「うと  
互ひ小書なる巻紙のさるめと云  
「次ハ

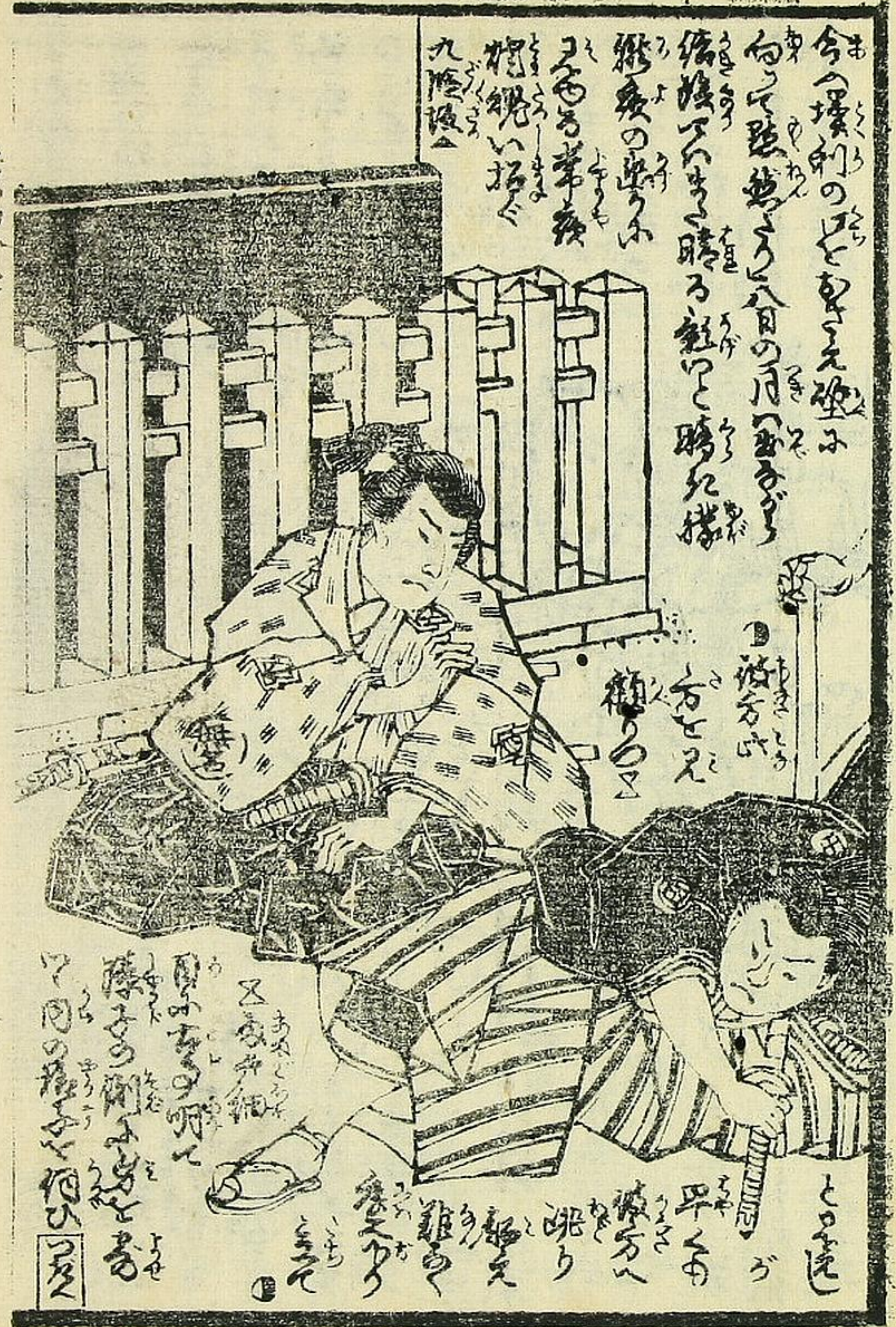






つきはあそ君彼が邸宅の  
 裏表極み知つる  
 工面あふあひ入ぬ  
 昔屋竟中  
 彼が生匠と  
 掲げをぬい  
 忍衆せん  
 「アア勇ほ  
 物も甲斐又の目  
 頭之交際」を後  
 ひとし一かき  
 ひとと入へ互ひの  
 月と月見合せて互

▲廣海寺後が邸宅（表）  
 あり一個の曲者寄の  
 烏ら鳥羽玉のまゝ  
 仕家末後面中  
 武者作りの木  
 と横へ  
 長きぐん  
 鐵の柄  
 なをを  
 へひ  
 りとあるよ

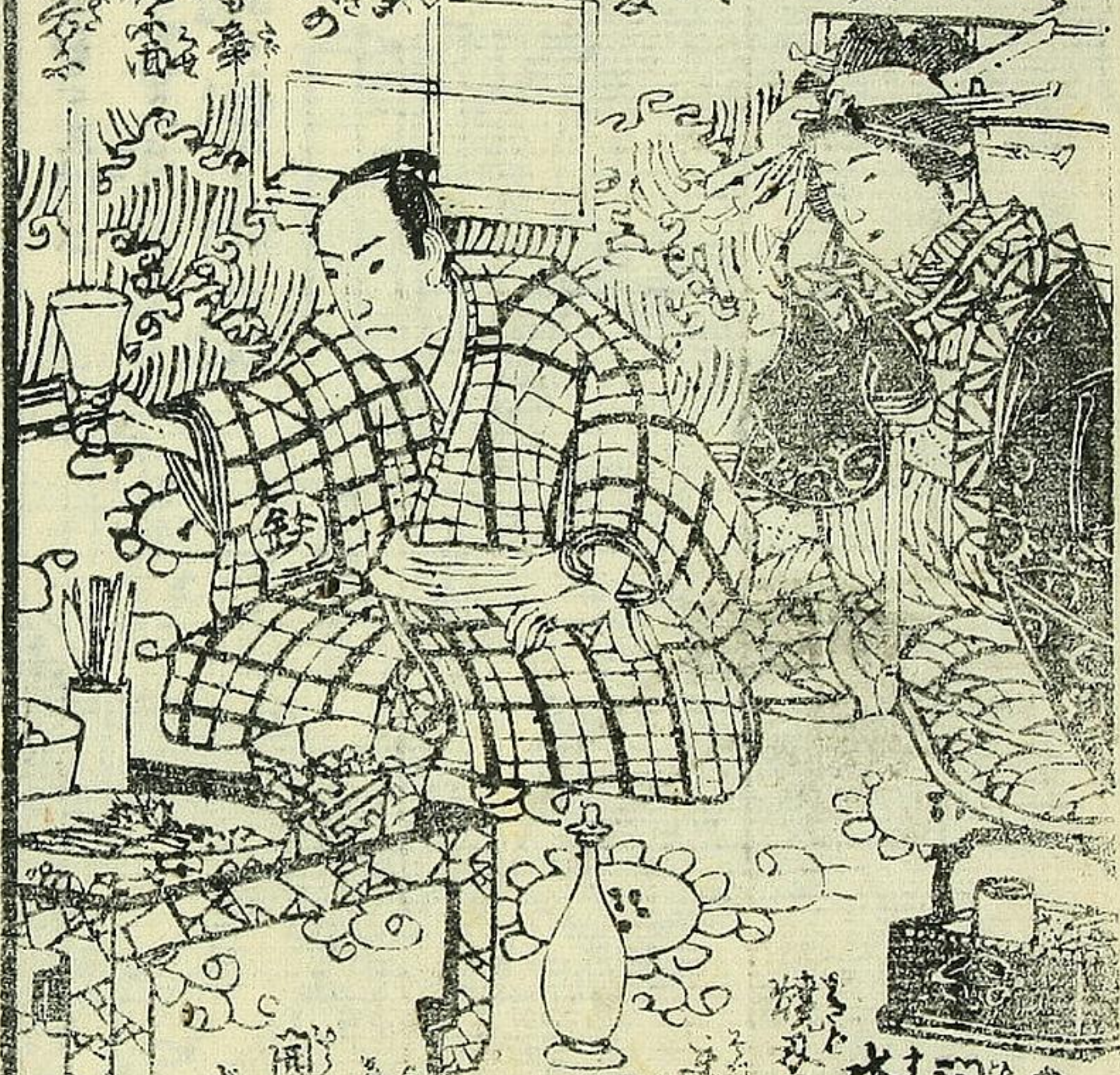


今頃刺のほどをえぬふ  
 向て懸懸さう八日の月（あまきり）  
 依後下りも晴る程いと晴れ様  
 懸後の出うふ  
 又もる常疾  
 惚惚い招ぐ  
 九陰候

後方  
 方とえ  
 懸の  
 との  
 平の  
 後方へ  
 跳り  
 難  
 後方  
 との  
 月と月見合せて互

つぎ形つ輝き  
ぬゆのねどま  
知ぬはたの美  
る六権妻の  
何一鳴くあま  
む上座のあま  
島島のまを  
さうろる巻  
らぬ敷度あま  
女針のむら刺の  
山嵐あのかたも華  
るまがけに極楽  
者い落ふのはた

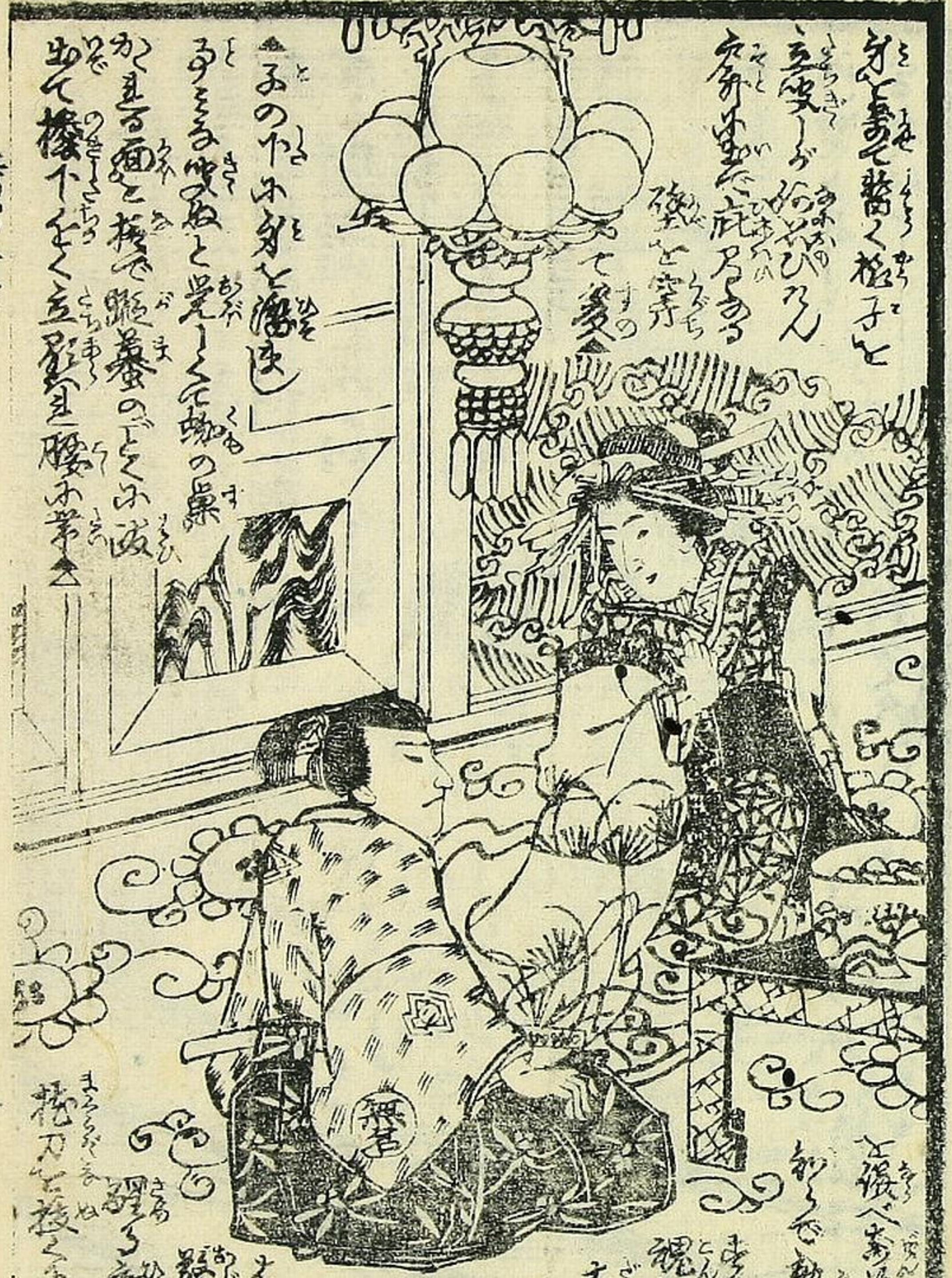
会せし海力と  
門りし枝と杖  
水い雨あまの  
再入道と  
文様ふ額の  
雨雲の落手  
さあねと  
開きて眺り  
さあねの  
かたと杖

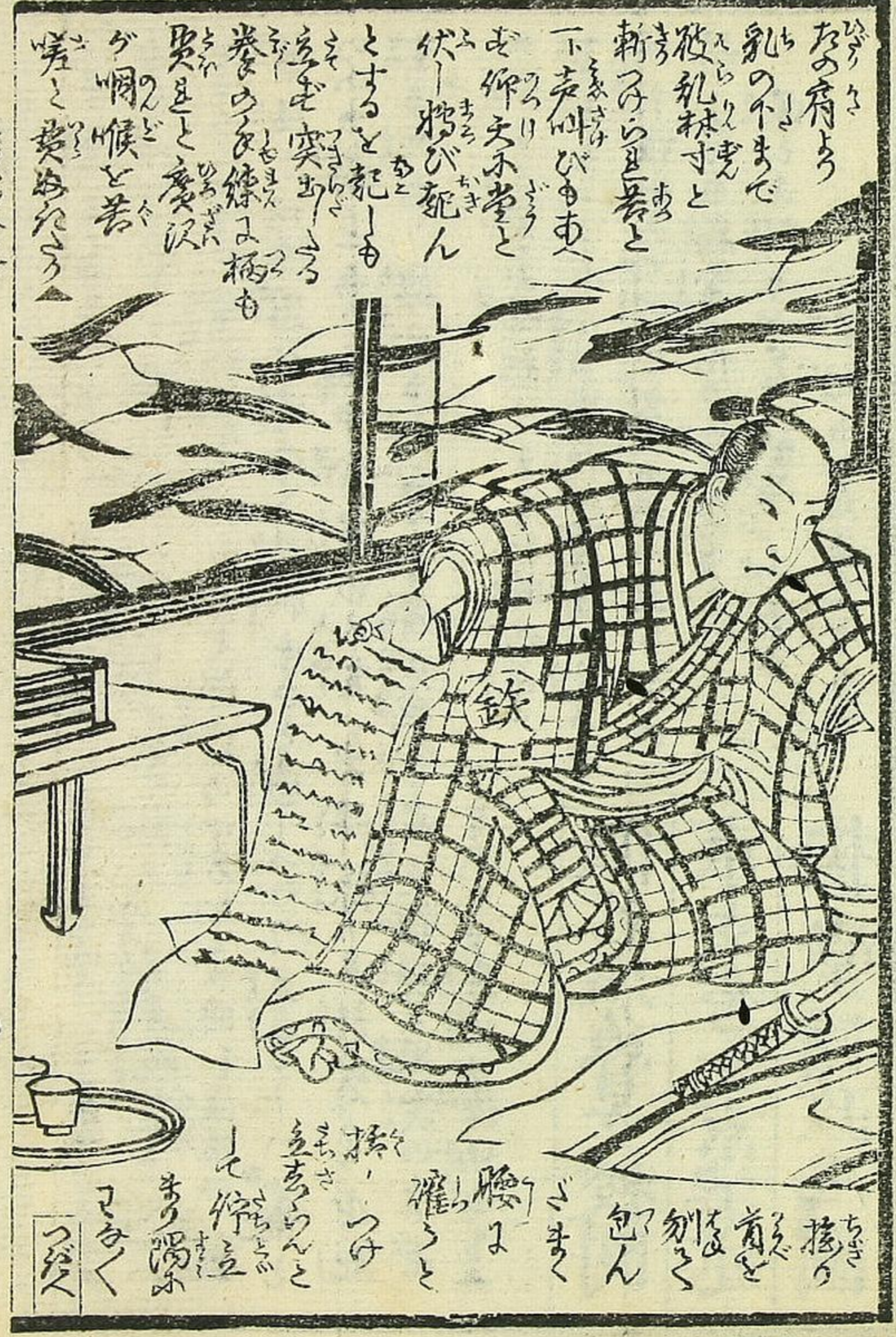


身とあを替く松子と  
三度一がゆひえん  
六舟あまのたのま  
後と雲  
てあま  
あまのゆいねと海は  
あまのゆいねと海は  
かまる面と枝と藤巻のういあ  
あまのゆいねと海は

後へあまも  
初め熱眼  
まらあ  
視を破る  
大唱  
一声  
あまの  
あまの  
あまの  
あまの

松子と杖とふつて入





おの肩より  
 乳のくまへ  
 彼乳林寸と  
 斬りつら且若と  
 下声叫びもあ  
 る作文不考と  
 伏し物死ん  
 とするを託しも  
 多き突あし  
 巻の糸線は柄も  
 異はと度は  
 分咽喉と若  
 嗟と費ぬたう

ちき  
 握り  
 首を  
 割る  
 包ん  
 しま  
 腰に  
 確と  
 掛  
 七  
 まり  
 可く  
 つ



つき  
 ヤと接する早急の強弱ひ違ひ  
 曲者うたへ概とあると  
 逸まを身と及一白ぬ  
 なる抱いぬ地  
 せま切つる  
 跳り舞うて曲者が  
 上座より振舞を命  
 の下を七折敷を  
 本意の端よ  
 流渡を接  
 方度法

麻な  
 何れ  
 果敢  
 呼吸  
 絶  
 曲  
 終  
 痛  
 の神





